繪本太閤記

三編

特
へ伊13
1833
26

東京都立中央図書館蔵書

18 村
1833
26

繪本古圖記三篇卷之二

目録

光秀波多野兄弟を捕搦話
同圖
八上の城兵光秀ゞ老母を斬殺る圖
光秀丹波國平均之話
光秀亀ヶ嶽の城を攻落る圖
光秀雪中金山の城を攻落る圖
光秀赤井悪右衛門を誅る話
明智左馬介村上和泉守埋伏して赤井悪右衛門を討る圖

赤井悪右衛門討死の圖

佐久間信盛と相御村の吊合圖

秀吉の役佐久間信盛と相御村の吊合圖

信長公四国等被改易秀吉因幡国のこと

秀吉計中国勢の後を襲圖

蜂須賀戦浅田与右衛門討死の圖

佐久間蜂須賀合戦之話

秀吉の役佐久間信盛の城を囲む圖

大阪府立図書館

真顕記三篇巻之二

光秀波多野兄弟捕獲

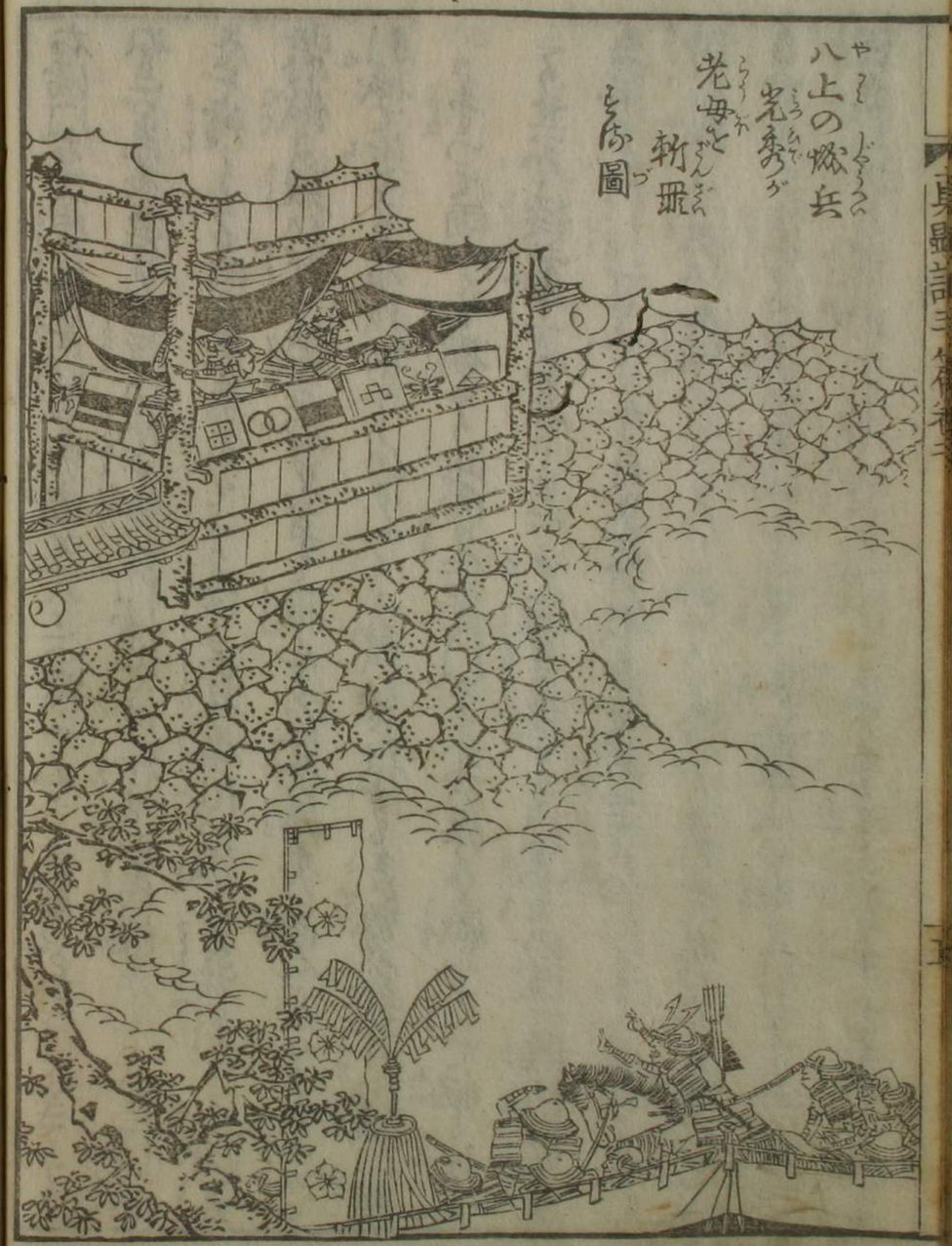
去程に惟任日向守光秀八上の城を責るの既に二月に余るといへども城中更に弱る気色なく惟任方多謀死人数多出来ぬべかりけるに西丹波衆上の城陥り大将宗長宗真自殺して彼表悉く平定し羽柴秀長播磨に陣せられ侵略を仕光秀中国に出馬し給ひ光秀大将と雖も我丹波の守護職を兼ねる羽柴秀長の功の首つなんに比真龍の挙動多年の軍功捨て置難し信長公の御機嫌を計り命を捨て此城攻落し大功を成さんと細河是角中村なる山の端に立て漢一切ども村雨の如く矢を射かけ鬨の声を上げ大石大木投落し大筒

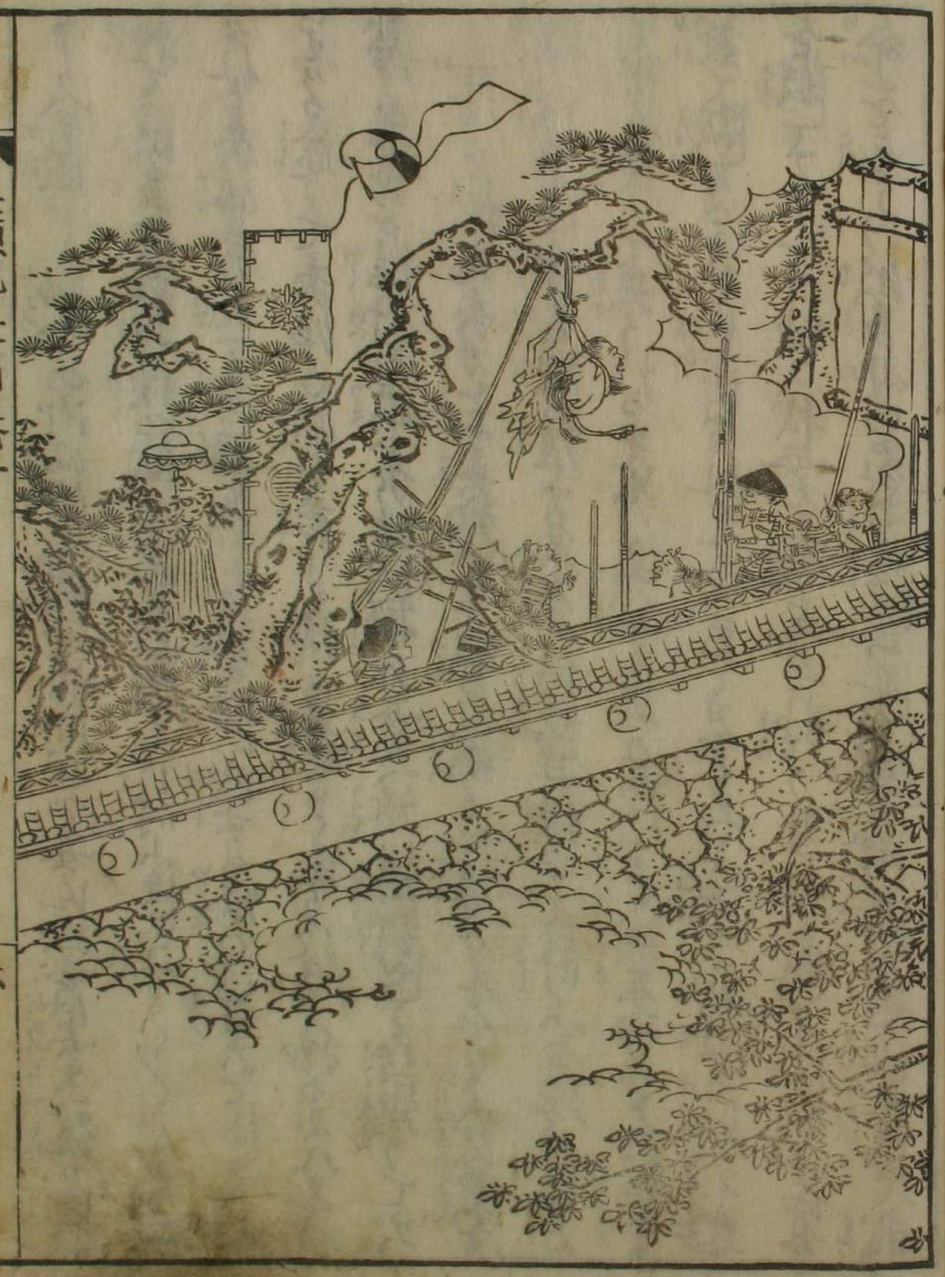
光秀
波多野
兄弟を
搦捕図

小筒の鉄炮を放かけ打出せば惟任方心は矢行に手負しかども面も向ずかゝりけるゆへ峯を握り城を向眼て居けるが光秀も退いて此城の形勢を考るに力を以て責る時は味方の死亡多きのみにて露斗も城中の弱りとはならじ只緩々と四方を取囲み兵粮の竭るを待より外に術なきとの計策に及びしかどもさえぎり延々に成んべき戦ひなればとて種々謀計を廻らしけるに細川刑部少輔藤孝光秀を諫めて申けるは羽柴秀吉の長西丹波と早定に播州へ出陣せりといへども前國の合戦にならざれば其のほどの敵後の事と討て既に気を城なとの要害は其術に打捨置かり其上西丹波の武士悉く皆勇剛の害もなく易安の士のことなれば征伐をするに甚だ安し夫殿の向ひ給ふ所はこれに異なり敵悉く勇壮にして数代当國を領し来り民よく是に懐き従ひ皆死て以て其恩を報ぜんとす加之此

八上の城は丹波不双の要害にして秀長が責落しける城とは日を同じくして語るべからず況や城将秀治秀尚絶世の勇士なるをもて郎等良従一族家人悉く一人当千の兵ならずと云ふ事なし然るを今卒爾に責落さんとせば武勇の名折れとならんなど思ひ給ひて長陣の戦ひせさせ玉ひては甚以て然るべからず既に秀吉三木の別所を攻るといへども未勝敗決せずとかく時を過して兵粮の竭るを待のみなれば良将の行ふべき軍立に足下其成功遂げらんずるを計として城将を全ふさせ計略こそあらまほしけれ城将秀治が勇名は隠れもなき所なれば光秀是非に其の勇に感じられば秀吉ぜひの軍勢に加はり給ふ事あらんずる小城を食め是になんぞ云んも勝れし人にあらずや即附属当國一円の治せんが勇ありとも小足らずと是に有るが諫めに従ひ丹波の山伏西蓮院と云ふ者を以て荒木山城守が八上の城へ使ひとして遣しけるに

今度丹波国光秀を仕丹波征伐し
天下一統の功を立て一方成を平の世に和
下に属し忠勤を抽ひて丹波一国を賜り波多野兄弟和睦せしめ
上洛の御内意なり光秀七枚の折紙を書て知らせ
て平和に和睦せしめ
光秀に保証せば光秀の思惟して来て彼西光
流と仕やうの秀治の下の輩ひとを殺せんとて光秀が老母と人質
と城中へ招渡し秀治に信長に属し全く丹波平均せば
あの和睦との幸みなり
仕て密使を送り誠を上に逆心別意の
の義滅ひ日七月二日光秀方より老母と城中へ送り
右清門を手秀治を迫る秀尚る八上の城を出く光秀の方陣へきて
ぬ上に光秀基元と怪び双方まに礼儀を伸和睦の盃酒を上り良酒宴
をそ儲へる時は光秀の兄そうう清
時儀は義ひ紀り波多野兄弟を搦んと秀治秀尚に得ようこと
引張て近よる者共切ひさんぐは戦ひそれども多勢の兵士和後て囲
物手つて両人とも搦より時兄右清門を秀治を疵を負て悩へ仕
より其外後者十人悪く元とは捕立後ともし安の城へ搦上信長
の御下知せ仕せ
計ひ物は遠ひ不信のるまひは仕
るうんとも如ど況や老母を人質
逆意に搦き保証を搦捕べき調


八上の城兵
光秀が
老母と
新妻
を殺圖



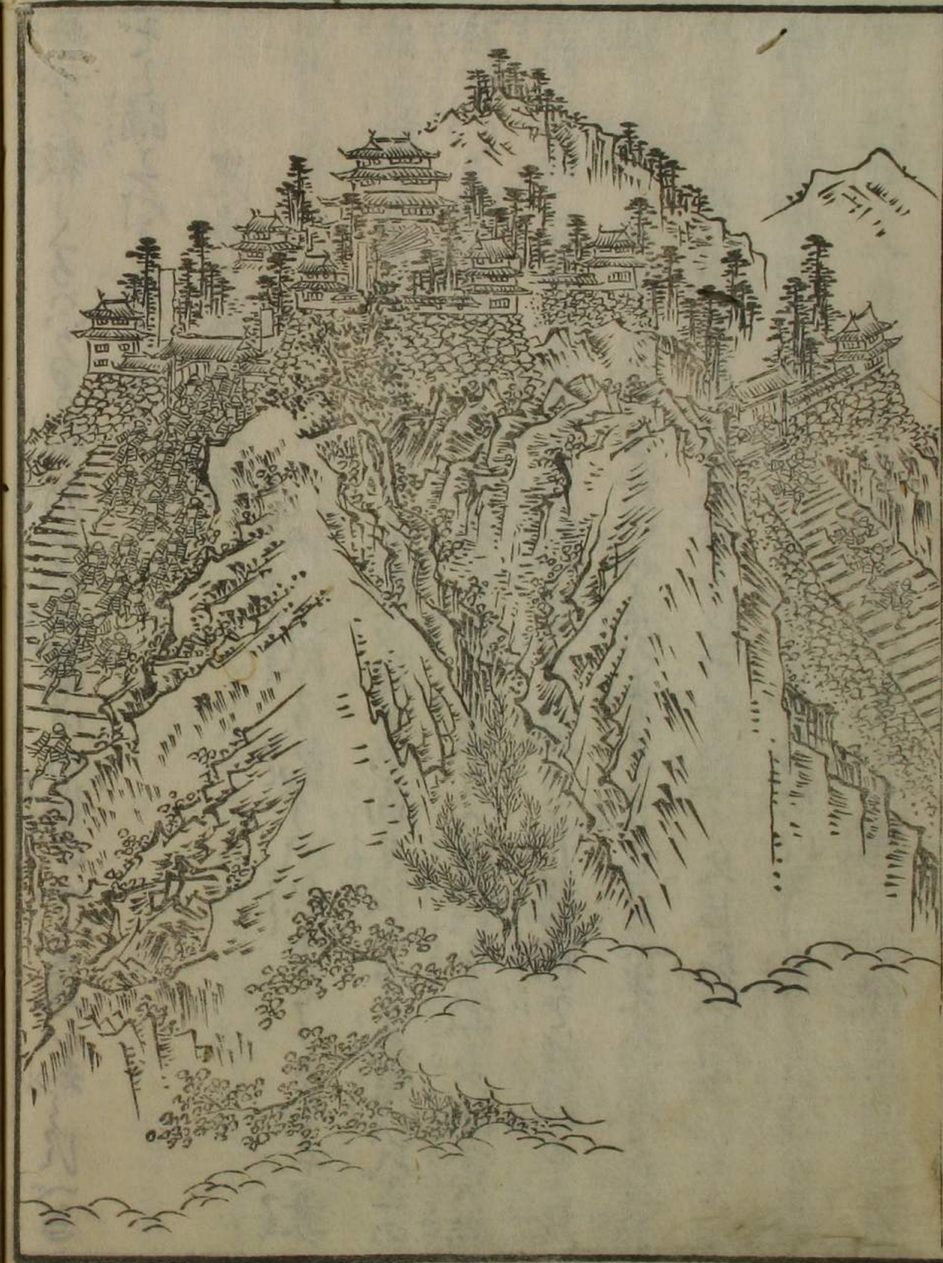
やう〳〵光秀く助命の御沿法や編べきの間心を安んじ（度安宅）殺うと思
ひて波多野兄弟に対面くい討（ほ）ゞよとくくと勧め
たれど秀治秀尚（言の詞も出さず）絵図の武士と偽りし安宅とと（て）と
まる途うて秀治も疑を者〳〵と紙に墨をかりて拵るハとハ
城中光秀が係計を構（秀治）に撰元安宅（所）（係就せ）と偽りて大
み如り大紙光秀力を入れ美敵小手紙ハ（ハ）の係りの係るものを仕立人兄弟を
捕（係）とるの案言後に絶る不乱の約束其儀ゝ計ふ定りのみと
て波人賀〳〵て来りたる光秀が老母を大なの門に樹本つりとげ磔ま
無て殺（殺）ろ〳〵て光秀ろ〳〵し光秀と人〳〵大よ敵き我波多野兄弟
を殺（殺）〳〵んと敵ゝ我母を殺とべきい強りなしど我いふ心（て）兄弟が
命を乞うけ波多野の家お繼せ（ん）と心を遣（居）ろ家（て）先達て我

老母を殺〳〵るいうる元分ぞや已城中の奴示今よ思ひ知〳〵べき
ぞと踊とゞ〳〵く如りゝる

光秀丹波国平均

此時光秀老母を殺害せ〳〵し憐り心既ゝ多く妻
本を計既を石安ちよ系向せ〳〵波多野秀尚を後をヤ更再びハとの
陣取いどるひ来りけ（る）が光秀の下知（て）大なる磔柱を拵多の梅（秀尚）
及び後者と下十二人悪く波柱よる〳〵拵りとげ名顕を強強りて強
柵ゝ言とゝ〳〵し城の家に押ゝ大きりて云せろい光秀波多野家
をお繼（秀治）光秀を丹波守ゝ（と）強〳〵大名家の御中知をお
約束して城中の奴示いふ小心わ〳〵ゝ人賀（て）出（る）老母を殺
せ（い）何ぞや其殺ゝ秀尚を後ゝ（て）く磔（て）無強ゝ べき間城中

光秀が
山嶽の城を
攻落す図



の者尤眼を抜ひ置と見るべし然りといへども光秀が私の怨を報ぜん
ざる事之別に大臣家より御下知の無きは安堵城中の者どもも只今城
を開き何方へも落行者あらば光秀尚更彼が命を助け安堵なさしむ
るべき旨信長公の仁心なれば給度さるゝ頼もしき今光秀母の為に彼を
を実に殺し退福に倣へんと思へども君命黙止がたく御役の仮中をを
れ間もなく思案にも極めかねけるも返答に及ばれし遅退せば秀尚主従を殺し
火を放て城を焼尽し上下の人民悉く粉のごとくならんと罵りければ
城中秀尚の存命を見るべく肝を潰し我々家に籠城せば主人を殺すと
もはや是迄と降参して主の命を救はんと忽ち城門押開き我もくと立
出る故是に於て光秀が下知を左右に別れ扣へさせる明智左馬介四王天
但馬守妻木主計頭溝尾庄兵衛等三千余人卒に周を取りかけ

鬨を一度に突崩せば思ひがけなき城兵どもも防ぎ戦ふ気勢もなく我
先にと途を求めて逃行をも追詰て切殺すこと麻のごとし左馬介は一手の
兵を引て城中に乱れ入老若男女の嫌ひなく片端より切捨れば血は流れて
川となり屍は積て丘のごとし此時光秀は櫓に打登り下知して秀尚主従を
悉く突重ね哀れにも八上の一城一千余人落行者もなく皆斬害
をぞせられける依之丹波一国は向ふ者なく大概平均の由聞えければ細川
是角塩河中河なる山家の諸士も悉く陣中へ来りて光秀は諸軍を
收め一先亀山の城に帰り軍卒の労を休めけり同年九月細川刑部
大浦叢なるに丹後国を賜はりし信長公より御下知あり就て惟任日向守
力を合せ丹後平均を急ぐべしとの御事之為に禰で今般細川惟
任大軍を引率し丹後国へ乱入し田部の城主一色左京太夫義道を戦

ひ終の勝利を得て義道に帰して丹後に凱本寺定
て後の国辺の城を攻て一月余りにて丹後に凱本寺定
り月十月丹後福智山及び近辺の郷民悉く所々の番城を嶽
和して城を焼き釈迦寺尼佛願寺浄土和守日下総守仁木左衛門
中沢右馬賀田加兵衛名倉豆水谷の勇士楠籠と下の兵士三百余人
日毎に村里を徘徊し狼藉を掠め婦女を犯逆恣に同御弾正討下
さんとの雑説ひよ迫くや出るふで光秀さらば彼地に殺回逆徒と退治
とて同廿八日敵の軍兵赤もとゞ丹波の刻を先とと勢
の明る朔の刻計に発て嶽に押寄せしも強弦の山城へ安三安三と奏とり
行て討る程に城中不意の事なれば防ぐに途方を失ひて撤の
を用き去年ども我先にと逃纏にて大敗の若名恐れ多てふせ

ぎ戦ふとても絶に叶はど釈迦寺尼佛願寺浄を始めとして下の軍兵
百余人討死しいおる安まい嶽のふと教とおろく皆方くへ落行る
其外日数の経る小城又不和其日の内に開退れば此上は別条なしと
して発て城を焼てうの福智山に立て天狗馬守日下兵衛右田長八郎
御牧勘兵衛加治石丸守る八百余人を止め亟此辺を静謐せむ光
秀は元より永上郡を立て金山に本陣を張赤井又郎忠家籠
こる丹の城に要害堅固の家臣を居城保守とと奏嶽さんと其勇
兵衛尉さうろう其夜俄に大雪降来りて山路を慎む光秀の陣
所を乱に堪ひ難と赤井悪右衛門尉雪にて寒の寒ひなりと
赤井又郎と合体して逆兵勝つて八百余人諸軍卒に撓をうけ終
程二里と一弛に金山の陣へ押寄り周を囂と鬨り遍るく寄て

光秀
雪中
金山の
陣を
級支
図

くれが惟任勢思ひうゝぐ所幸なるしが周章強きて防んこころもの
なくなまく戦んと思ふ者も二人余に積りたる大雪なれば足の踏べき
不もなく戦ひ難儀なる赤井勢い多て既て敗軍幸なるしが撫いたき
川得掘い入うりの暗しも犯強べきさんぐ切立れが惟任方先
陣より百余騎孤と成て本陣に逃れ二陣三陣旗本まで
悉崩れて人馬共戦ふべき術を忘て徽塵よ散く引うりくれが光
秀も心なく泥酔して亀山の本城まで退きくる

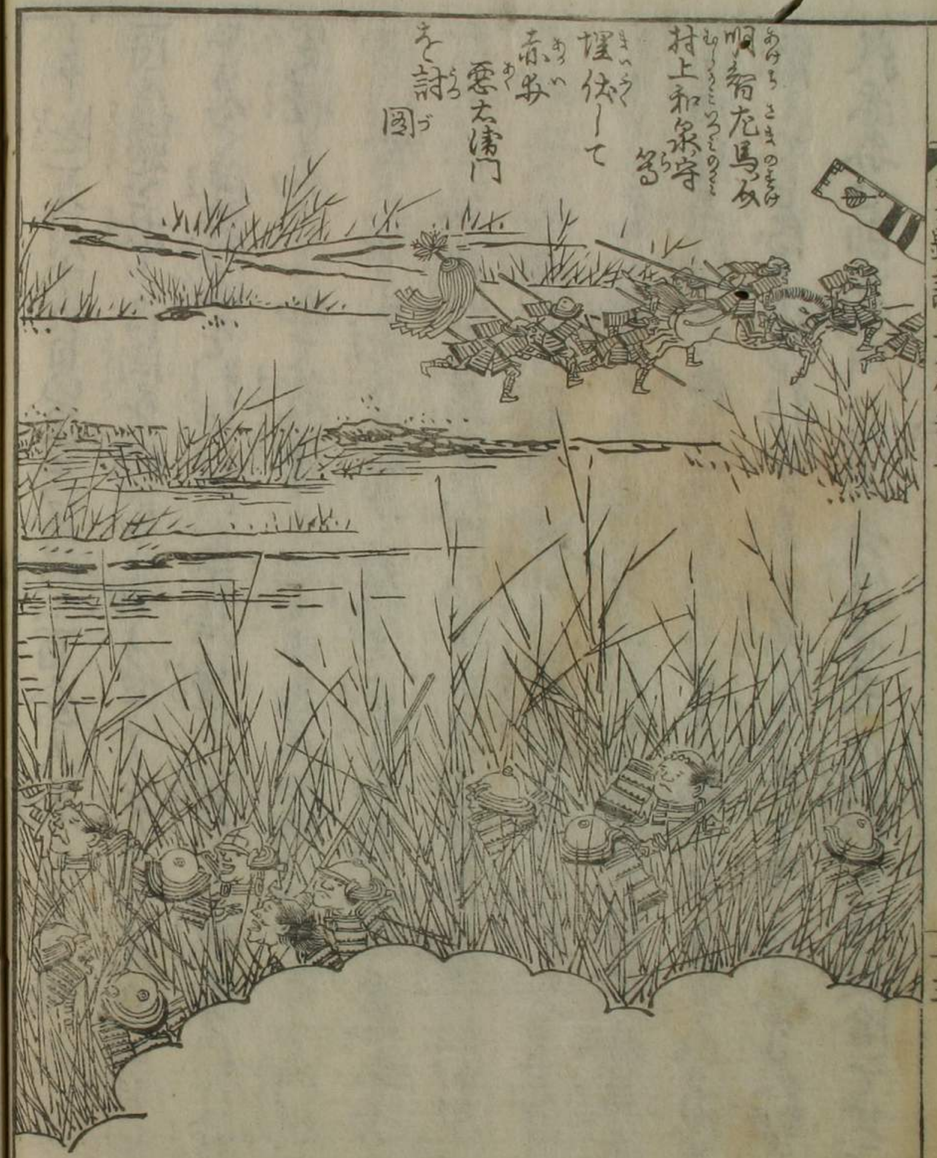
光秀智計減亡赤井家

然りし程よ元の城主赤井忠家保月の城を赤井悪右衛門
遠い大雪紛紛として光秀を追崩勝利を得ゝよう其勢ひ吉と
震ひ畿内近国の浪人ども我も〳〵と赤井と一味〳〵今い光秀の別

兵にる余人も及びくれが底くを郷へ打出猛威をふるひくる其勢も驚
程天正七年秋九月光秀公と征伐に〻大軍を引率し八幡山を
出張彼を弱き逆て陣小屋を設く彼り並べ長陣の構えと
云赤井悪右衛門世形勢を見て惟任が軍を何の恐るゝこと
あらんと赤井七郎左衛門は表兵衛保国美濃守久下弥左衛門
佐国左衛門尉牛左衛尉左衛門等数万と其勢一万余人城より
廿余町出張て勇奇を含んで拒う光秀が光陣左馬允光春
足軽を勢く戦ふる彼月に及ぶとゝ雖も光秀が知恵
て城兵を悪くひびき出て討んとする計略なれば光春熊とよ
くと會釈ろう城方よい去年の勝軍なるゝひて毎度難ひら
月〻戦ふ程よ寄手多くして討る者もあるうん

元に後て赤井が兵士勇を奮ひ一時に惟任勢を討敗せしに追
撃う雲出る紙八幡山より大将の先秀吉く親ひ及く諸将と集
て竊に知らるい伏兵を以敵の不意を撃べき時宜到来せり
明智左馬介村上和泉守御牧三左衛門明智治右衛門三宅藤兵
衛惟勢五三郎六郎の右の敵の糸なる黄金に二重に如く惟任と
へ〳〵松田太郎左衛門溝尾庄兵衛彼彈守以下の先鋒に進
む敵と鋒先を揃へ〳〵仍り頭て引退き妻木を計り荒木山城守は
八幡山の後の谷合に隠し控軍とあく我が知を受て討て出べ〳〵
進士兵左衛門は田舎力の諸軍の小屋〳〵に火を放ち逆列陣を
敵に知らせよと〳〵既に宮うの明智十郎
左衛門尉は天個馬守等の勢を引て敵の出る機へ押寄せ

と中略九月十九日の夕天王寺の二百余人赤井方の陣前に進み
同じ鉄砲を放ち合間を伺く掛よせて赤井が先鋒の騎馬の兵を
を見て逆義本を引のけ六七十騎嚔く鳴ひく駆出れば寄手の
足軽さんぐ〳〵なれて逆教う用田左郎八加成清治郎下河辺右
衛門以下二陣の寄手入智て鉄砲を打かけ戦ふ程に赤井方の馬
武者又六騎忽ち落されひるまて又〳〵る者と續け引るとかつ
て赤井の後陣より数百人馳加り遮間もなく戦ふて寄手
ちりぐ〳〵なれて逆うう惟任方の松田左郎左衛門溝尾庄兵
衛彼彈守並川掃部助きて引る味方のふるまひる軍を
角こそと思りのうれと大声小罵て馬印と押立て切て
敵赤井七郎左衛門伊田兵衛守赤松刑部大輔四合て突と敵


明智左馬介
村上和泉守
埋伏して
赤井
悪左衛門
を討ん
図

戦ふ程なく家の廣言なども仰合せて松田溝尾が勢さんざんに成て
逃出せば旗指物も打捨て押倒し〳〵実こと〻に因幡ふるさきの陣を
く〻なる赤井勢計策といふ義にもたがはず〳〵勇を鎮波と称り
結へを乱て退うけう光秀の山形勢と見て本陣も崩れ立る
作よりて色目を陵竹の馬印丸孔雀の九本旗もさんざん
に打倒る八幡を南へなだれ崩れて〻〻〻進士能九郎比田
常力ら陣屋〳〵より出て放て一日の焼立々れが光秀の家の如く
保月る見の城中より色を見て味方の軍兵惟任が弱兵と称り
八幡山の陣屋に出て無うと光秀るぞいざや先々に押寄き分
捕せよや者どもとて大将赤井悪右衛門尉遠紺糸威の鎧に龍
改を居る白筋の兜を着て〻〻〻れや赤毫馬たいなる大かも赤き荒

馬に具鞍置てぞ乗り〻る其外中沢赤松兵部等の勇士我劣
じと奪ひ〻〻〻門脇川と乗紙く迎る敵を追さう〻る見の城
に赤井太郎も同く城を出て〻を追て幕下の勇士浦上長左衛
門尉ると始めし両城の道兵合て二千已百余騎天地も崩る計
因の声を殺あまたる浅ちるを〻〻〻撫よりんでぞ追さう
〻る付射て直て置て堪たる明智左馬助治右衛門等七百
余騎俄に駆りて因の声を殺三〻〻〻に分て敵の真中と撲進
に突崩し〻三度三に駆立れば敵の大将光秀遥に体と見
乗配打て返せや者ども〻〻〻ふ今を迎る松田
溝尾並河中沢伯耆山本萩野波〻伯耆が軍一日よりも〻〻〻く
に鎗衾を仰て〻〻〻拝る敵を突崩し〻鳴き叫で戦ふ赤井

赤牛悪右衛門
討死乃圖

が軍勢をくり款い謀計を構へるぞ引やくとつふ程ことを討
るまぐも元と助けば親闘よる敵ば右往左往義乱我元と
逃遁よを惟任方の勇士劉幸はう賢と切て出う東西へ走う南
へ退靡け敵款とんる武弛なくへく組て落て首を立相敵款
と思よをば一方打ていよせちし一所よ合左右へ別ま巳方へ敵八方
ぬぐり斬ま羅ま取る程よ赤井勢討る者敵を知ば岡妻本を
計既荒木山城も両人よ勢引ぐし保月の城へ押よ城を奪ま赤井九
郎よ火を放ち焼ま立て福知山へ引れる明智十郎左清門巳ま天但馬守
名る丹の城を奪落元も日向よ出を勢う候ま赤井の軍兵退へ
き途もなくま進むぐ方も巳仏石を乞も実ば て思ひくよ
落行うまし大将赤井又郎い敵ま所の多府物ひるぐ南なふ

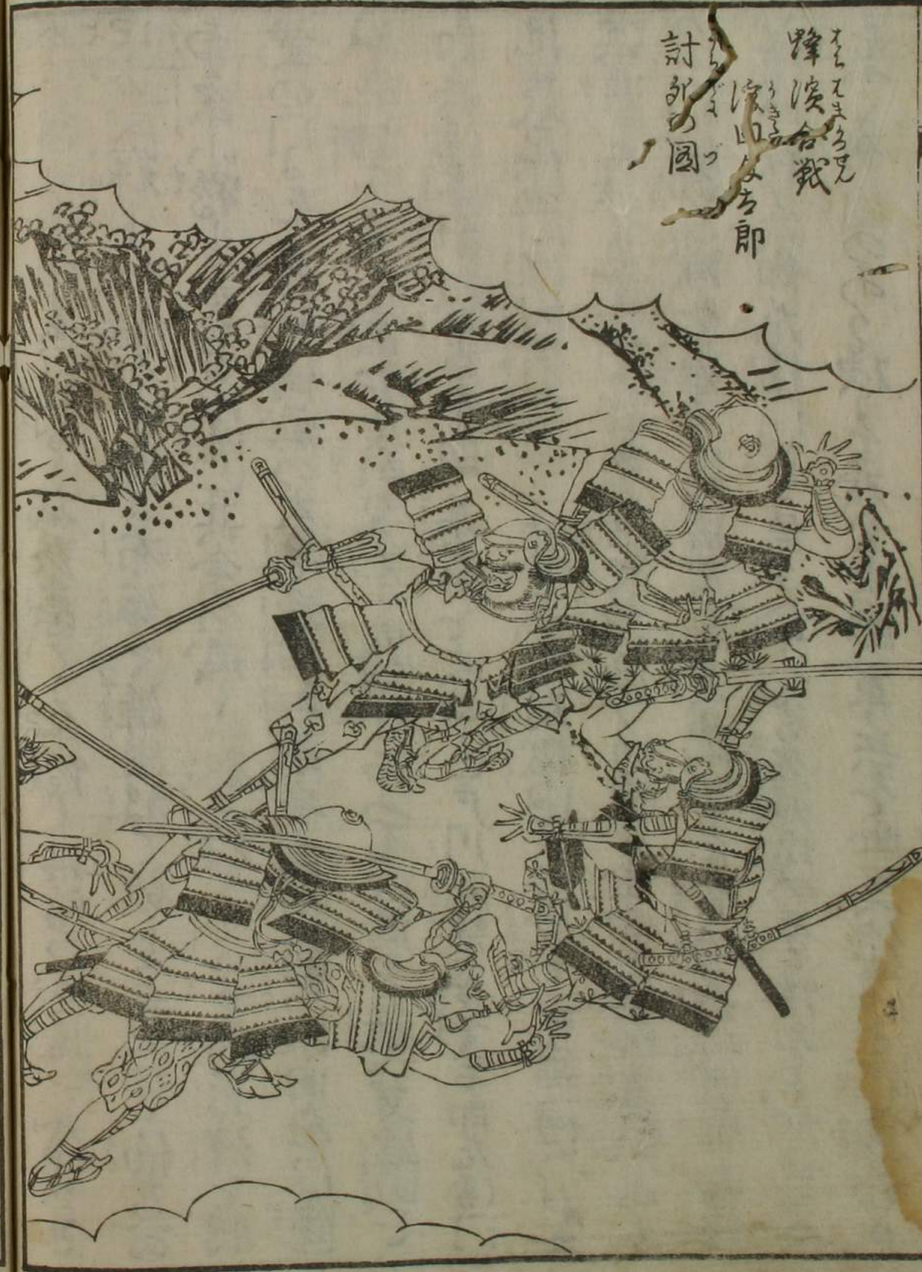
ふと仏ひ摘麿の方へ落行る赤井要右清門亦ま以十余人ま討
るまし居城とまして引るが保月の城よ火のよのよう乱ば今い備ま
思ひ乱馬の既を立巳ま十余人を左右へ立討死ま元倍へく敵を
向て打る流石丹波ま名を得る勇武の程ぞ知ま且る惟任勢
勝よ奪ま立先よ明智左馬介兵清松田方郎左清門等二百
余人徒を乱退来る武要右清門會釈もなく切て入出る者を切出る
よ巳人よ切ま乱おるの大勢巳方ぐ乱と迎敵う要右清門囲と
出て味方と乱ば十三人ぞ波うう今い元まぞぞと良多よ防き矢
を自害せんとまう乱る小又惟任勢雲霞のごく集て余ばまと
揺ま乱ば要右清門大よ始う祖元まで母の落うし大方三向よ
掛ぐ二度敵の大勢と退るびけ勇を震ふて戦ふう明智左馬

久が良なる林秀正郎と云う剛の者悪右衛門と渡り合ひ対斗戦ひしが
赤井絶ち力無く秀正郎に討たれ浅兵二人ものこる者なくなる足保
同篠城怒平定しうらんじ枝城に籠りあるひい落ち入討丹羽
一国悉く平均皆光秀の手風に靡く丹羽は三十六万石西近江に十八
万石合て五十四万石にて威勢遠近に震ひける

信長蜂須賀合戦

中国の武将毛利輝元の家臣吉川元春の中より出て信長に対
仕へ奉り朝倉に固き城を拵へ多の剛き敵を碎き進み出る光
秀退き難き敵を仕保せ加へ奉き計策を設け其者を
保きに居ながらに幸てい朝廷に功を図り令を以て民
風に従ひ幸り懐く其居下に成る者い皆命を以此人に捧げ仕さしば

今天正九年の春に到り悉く平均し姫路に至て武威を
四方に輝し仁徳を中国に布張る播国敵て欲しき者なく伯耆の
南条小弼も秀吉に属其余の城に一郎一村の主に成者皆降と羽
柴の門に成り秋中伯耆の太守渡田和泉守安家新に小田垣に遍
ぬ忠功を立て城を取らんと蜂須賀に成城を構へ牙渡田七
郎兵衛忠家行るるを郎基家と名乗と戸川肥後守逸郎左衛門
池田八左衛門渡田彼程三の余人を籠城させ中国に切入を
其勢に換へ毛利方を攻て蜂須賀より四十余町を降参飯
に成て向ひ城を築き渡田勢を支へ宵地員に成る右志信
左衛門村上八郎左衛門等三の余人を岩屋城の番信を急ぎ
もく戦国のあり様を成い者を図軍兵を出又他国を把揉む


鞍渡合戦
源山次郎
討死の図

其外の寄手も戸川が馬を出だしたりと聞き出だし〳〵其勢既に二
千余人より集りうち毛利勢むくてい味方いはじと麦飯山うち穂田伊
豫守村上八郎左衛門有地兵部少輔なども同じく二万計浮田勢に横撓
を入れ突き入れば浮田軍勢眉を顰めて引き退く蜂須賀小弥太居る
浮田与右衛門基家四郎壮んの若武者なれば味方の兵を討せじと
白糸にて威したる小具足とんだんの兜を着て黒き馬に勝り撓と振
て味方を励まし三度三度切て入れば毛利勢用きるびきて良員ろ
ろ〳〵うろたえ与右衛門基家が運や強く名誉が放つ〳〵もたりぬ命
一つとび来れば基家が胸板を打抜きうち倒れもなうう得ん馬ようう
落て死んしば毛利勢一統に緑波を挙げ喚き叫んで切入れば浮田方
弱く我ひ匹義くよりあく級を出だす時姫路の城より秀吉が命を

秀吉寿計
中国勢乃
後詰
軍ノ図

又和泉弥五長三千余人兵粮を奪う彼家の兵法に乗りて
思ひ〻〻ざまに大合戦をなれば行うはも粮尽きひ〻〻と船より押
三英幸勝て二千余人撰合より嘯と喚いて討てなれば彼家勢大
勇こゝろ比て戦ふ程の中国勢さんざんに討るされ麦飯ふまで引
なれば戦ひも somewhere とて深田勢和泉が勢勝岡を纏つて軍とま
ぶめ蜂須の城へ入るる此事中国（実へなれば小豆川澄系二万余騎大
軍を率し蜂須表へ殺回る也家も自二万余騎を率し蜂須と駆け
和も姫路へ行て秀吉に加勢をなる秀吉忽謀計を構へ蜂須後詰
のゐる秀吉自ら大軍を向はを編流諸方の軍兵を招き集む
扨先をとして勝須賀小六を大将とし又余人数百騎の兵船を乗り
海をよろ毛利勢の後へ回り攻後れ討んと秀吉勢

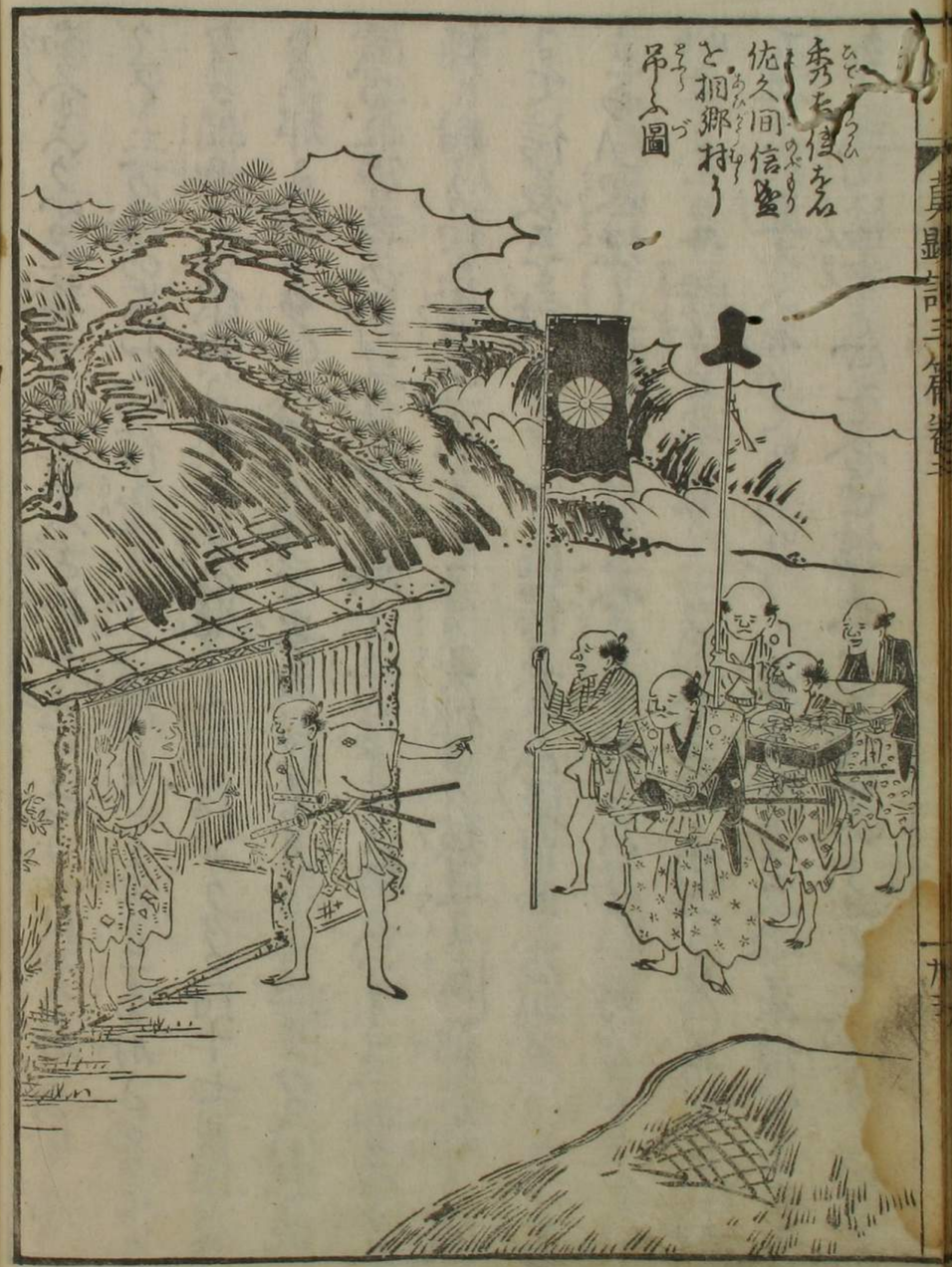
三万人余騎不日ゆ〻〻打立べきは頻りに沸せ〻〻なれば小豆川澄
系此のを安〻〻思ひ居るる小豆川勝須賀が先の兵船彼家乃
地へ入りて毛利勢の後へ迫る体より人〻なれば澄系いよ〻〻驚き歎
る後を立切るゐ頻雑城へ帰べ〻と戦る蜂須の陣を引〻〻ひ麦飯山
まで引なるる家は勝須賀に後へ引る家は押ひて勝須
賀も其後は船を姫路へ漕度ふ〻〻の上秀吉へ言上なれば秀吉さ
もばてそ〻て笑ひて笑はれる

信長公日記等彼改易并秀吉因果

さよう第天正八年の秋摂津石山本願寺と小田信長公数年合戦
歩ゆるを朝廷の御扱ひをん和平もべきは為ゆ勅使を遣はる
本願寺顕如上人石山の城を開き賜るの森へ移り移ひぬ〻ば信長

来り宿怨を晴し恨び給ふの限り也石山の城見ぐみ[illegible]て八月二日
寄せと御ふみて京都より宮居[illegible]到めひ松して大坂の下向の諸の
仕寄を定め給ふ其中に佐久間右衛門尉信盛子息甚九郎父子
七ヶ国の軍勢を加へ天王寺の城に寄せ程の小歌よむひ
仕出[illegible]るの[illegible]く軍勢と廻[illegible]るの勇威なきるまひと海く
憐りのひ書をん報ケ条を責成め捕長菴法印友閑を使者として
天王寺と退出され[illegible]に佐久間父子の弱き今更遠方の言るが
ゆいんもとべきもうなく僕に英金二十枚を情[illegible]腰に差され刀
名源の外に[illegible]に者もなく[illegible]る時[illegible]志をでくと云出る心の
内を計らひく哀なり日限百仕[illegible]和人ども皆ちりぐに成て
僅に付源右三人のそる時[illegible]も報を思ひ三人の

家人もいふかん捨ようん二人を勝を立て去り[illegible]る時[illegible]も[illegible]り
ぐく二万騎の大勢に信盛も今八僕に[illegible]と牽[illegible]る時[illegible]の展[illegible]
なる相郷とて小村[illegible]ぐり[illegible]婚[illegible]寄に住[illegible]る月十七日信長
公京都より[illegible]ひ[illegible]林佐渡守安義伊賀守と遠流せらる[illegible]林佐
渡守は信長公の御[illegible]後守殿より[illegible]て信長いまだ三郎殿中
せ[illegible]附ように家老の一人なりしが[illegible]英[illegible]るが[illegible]逆[illegible]に[illegible]那右衛の城
まて信長公と討[illegible]ん[illegible]て信長公武運目出度山[illegible]ひを免
さ[illegible]ひ怨[illegible]し[illegible]給ふ[illegible]を[illegible]若より付られ[illegible]ひ[illegible]居[illegible]るを[illegible]
此二十余年憐りと思ひ[illegible]しるが今天下御御[illegible]て[illegible]属[illegible]る[illegible]到
て林が死罪を宥めてかくのごとく[illegible]流せらるる安義伊賀[illegible]る[illegible]光
条武田信玄と心を合せ信長公を討まつせんと謀りしるを


秀吉使者
佐久間信盛
を掛郷村へ
吊ふ圖

かゝるうき名れども其時天下いまだ定らざる時分なれ
ども秀吉の謀反の人なりとて其まゝ捨置れるゆへ
は流罪に所せらるる秀吉姫路にみてけ中の次の歌國滅
て孫呂元ふと行中ゞ元秀の一言そゝろに思ひ出られ若年の人
を仕回悪を殺むゞとうや林安房罪ありとつゝも二十余年
志を改ち高ち仕まつせ今以後逆の心みゞとも元人ゞ徒
久間信盛偏狂の心深くさせる軍功とつゝも追放せらる
ゞ罪とても也今天下と三分して其一を得ゆ信長公
くも老呂弓矢の場心の侘よ行ひ人てそうをゞも落情
ゆしと深く元と歌恩私人を隠て林安房佐久間名に金銀
米銭の送りものと也称幸若を厨めゝしい皆滅を流て悦ろう

ゞ佐久間信盛日比秀吉ゞ出頭を偏狂〜其武功を妨げ
計略に遠ひ兼て不時の中ちゝ心ゞ今零落の淵よ引くつゝ
睦ゞかりき傍輩朋友ゝ親孝親人よりまで推う
方ふ者ゞきよ秀吉一人眼底思ゞ都て金銭を送り国郡を
助る仁情何人ゝ元を感ぜゞ〜人ゞ者皆秀吉ゞ情を称し
殺ゞ佐久間玄蕃ゞ以信ゞ物なりゝれ世佐久間を
夢ゞべきと柴田勝家ゞ和ゞ内縁の物み〜て元沢勝家ゞ
し〜深く其上玄蕃は得武勇選く加賀能者て度〜武
功みゝれ信長公も元と感じ〜ひ其まて也も也今度勝家
盛政両人ゝ加賀の一揆を討て紙ねの首十九安堵を献ゞまし
信長公大よ悦ひ勝家ゞ武功を称ゝ姥にとゝる金と場り盛政

を加賀尾山の城主とし給ふ其外諸中の國〻佐〻内義助成政と
い為ひ平均せが國を攻守護べき旨命せらる能登國い麾
惠多改尤清門年家を率いさせ給ふ秀吉公も同き御方を勢ひ秀吉公も
御下知あり〻よく中國を平定して探索すべと令ず給ふ
秀吉長り天正九年六月廿五日大軍姫路城打立て因幡の敵
在〻不〻と敬し鳥取の城を攻囲む而此因幡國い山名大義を補
添者國先祖より年久く攻来る者國柔弱ゆへ
毛利家に國中を掠め奪ふ此時郡主〻攻寄る由
依て毛利家に降参〻附の勢ひを以合せる彼る小先達て秀吉
後着を以者國を味方と拵〻者國先と率と呼び忽小田垣に属
〻山鳥取の城を攻撃る附る者國が家臣森下出羽守中村對馬

守逆心を企て毛利家に一味〻主人を退出〻名る五の城を籠て勢
ひを張り毛利の加勢を得て彼の因幡を押領せんと仕者國忽ち
秀吉公に参り来て次第を物語り仕度と申て秀吉大軍をも
先此鳥取に向ひ名る先より籠城〻る森下中村
両人秀吉公大軍を相手せ来る中村は毛利の所大将人中傷る
よ抑ひく城主と仕き防戦もとべく有ける毛利照元ゆう
一族吉川式部大輔経久の曾孫十郎をお添兵率元又百余
人名る元に籠城を乗下中村方に若び其勢那合に余人多名と
偽〻鉄炮を構へ籠城の東を攻る元来此城の要害に方離て強堅の山
城にて彼の形勢を伺ふ元来此城の西の海海続きなる小名の城西の方海

ひでよし
秀吉
ちくぜん
筑前
の城を
囲む
図

その間僅か二十又町和陣て西より東南の方に大河縈しく流れ落
水源きの計るべし此間より柴ぎの城を構へ海にも二ケ所の砦
を築き毛利家よりの後詰の兵を引入るゝなる度をせり其内吉
はゝ〳〵元と何ひ日〳〵に羽三廿八日の夜の陣営より備ねる四ひやさ
まるゝ城要害堅固なるとゝ人ぐも兵多くして兵粮兵器巻て
食尽て〳〵毛利家より兵粮を城に入んを塞く防ぎて集るゝ
ゝく秀吉の城の東に摩尼帝釈山の嶺より峯より此山とを
本陣として西より中村孫平治山名大義右浦要国足多勘兵衛柴
村隼人加藤度内東の方に信長公の御加勢二万余人雁金山に小田
の坊官官部若祥坊彼家国淳田ゞ人数淳田七郎兵衛岡孫右衛
明石飛弾守長紀伊守福田又郎左衛門和泉監物等八千余

人浜辺を守て陣を張り〳〵二ケ所の柴城の間とも悉く石切垣
を結ひ堀を掘塀を附芝を植ゑ〳〵を築せ遠間ゝ〳〵櫓と
あげ大なる石の陣屋〳〵もゝる櫓まゝ構へ後堂の周囲に後陣乃
方にもゝ〳〵る塀柵を造り柵を結ひ逆茂木楯和後二里計
の間に絶間なく築地あり て其陰に陣屋ひ〳〵と造り垂幕の柵
史桃灯白旗のゝ〳〵樽矢せ番所番遠見の役人高うなく
元とやる毛利家より掛勢の毛利家よりの後詰の勢を押へんとて秋里村
とゝ〳〵に城をうまへ長宗七郎左衛門涌坂新内二万余人にて元
を固むる浜辺より新地弥平三百余艘の兵船を繋ぎ船幕船
浦風に吹るひるがえる海浦の旗を張へ人馬の東にて上羽
柴小市郎秀長増屋源彼守山名但馬守等小の山より塩谷

後河守武田源治郎義安勇猛なるうどの勇力等
遍ねく陣立幾年左陣志てうとも風を見て
くことなくよろう

繪本太閤記三篇巻之二終